

情報科学部FD研修報告会

平成16年度の活動

中野 康明
Yasuaki Nakano

九州産業大学 情報科学部 FD 委員
Faculty of Information Science, Kyushu Sangyo University
ysnakano@gakushikai.jp, <http://www.is.kyusan-u.ac.jp/~nakano/>

1. あらまし

情報科学部では、教員による教育改善の取り組みとして、平成15年度に「情報科学部FD研修報告会」を発足させました。

本委員会の平成16年度の活動の概要について報告します。

2. FD活動の趣旨と情報科学部の取り組み

現在、日本中の大学でファカルティディベロップメント(FD)が叫ばれています。日本語では教育改善と訳されることが多いのですが、大学教育を教員・大学の協力によって改善して行こうという取り組みです。

日本では大学教員になるには免許は必要なく、教育技術の向上は教員の自己研鑽に任されています。このように安易に流れそうな状況下では、教員自らの意思によって、不断に教育方法・手段を改善する努力が必要なことは言うまでもありません。大学でFD活動が必要とされる理由の一つはここにあります。

九州産業大学でも平成15年度からFD委員会が発足し、全学的にFDに取り組んで行く体制が整いました。

2.1 学生による授業評価

FD活動の中では学生による授業評価を利用した取り組みが一般的ですが、九州産業大学でも平成14年度の試行を経て平成15年度から本格的に取り組み始めました。授業評価はあくまで教員の自主的な授業改善のために行うものであり、一部で懸念されているような教員の査定を行うものではありません。教員が自主的に授業改善を行うため、本学では授業評価の集計結果は各教員に戻され、教員はこれに基づいて授業改善報告書を作成することが義務付けられています。

教員が真面目に授業改善を行うためには、学生が真面目に授業評価を行うことが前提です。一方、授業評価を行ったことによって学生が不利益を蒙らないためには、無記名で評価する必要があります。受講者が極端に少ない授業では学生による授業評価を行わない大学が多いのは、無記名制を確保するためです。

逆に無記名で授業評価を行うことによって、無責任な

回答が生ずることも事実です。教員の中には、授業評価内容と出席率とを関連付けて解析したいという希望もあります。大学によっては、学期中はほとんど出席せず学期末になって出席する学生が多いそうです。そんな学生の授業評価に意味があるのかという教員が出るのも無理からぬことです。

2.2 授業公開

前節で述べた問題はあるものの、概して言えば学生による授業評価は教育改善に有効と考えられています。しかし、学生以外による授業評価も重要です。

筆者が数年前にイギリスの大学(徹底した教育改革により第三者評価を大きく改善した大学)の改善責任者の講演で伺った話では、学生による授業評価はやった方がよいという程度である。むしろ「同僚による評価(Peer Review)」を徹底して行うべきである、という考え方をした。

”Peer Review”とは「専門家による評価」という意味ですが、授業評価の場合は同僚教員による評価を指します。しかし、日本の大学では教員が他の教員の授業を評価するどころか参観することも嫌われます。

最近ではFD活動の中でも授業公開が目立っています。日本で着目されたのは主として高校生対象に公開して、多くの受験生を引き寄せるためでした。しかし、外部に授業を公開することは第三者が教室に入って来るわけですから、厳しい他人の目にさらされていることでもあります。その意味で、教育改善の一環として授業公開が有効であり、特に同僚教員に公開することに意味があると考えられています。

そのため、九州産業大学ではFD活動の中に授業公開を試験的に取り入れ、効果を見て全面的に実施する方向で進めています。この授業公開では、一部の教員が担当する授業のうち、指定した日時に本学の教員の参観を認めるものですが、参観結果をどう授業改善につなげるかは今後の課題です。

試験的とはいえ授業公開が決りましたが、時間的な制約で参観できないことがあります。実際、他教員が参観を希望しても、参観指定時間に自分の授業があつたり、出張があつたりしては、折角の機会を生かすことができません。

2・3 講義記録システムの利用

ところで、筆者がある国立大学に別件で伺ったとき、ある学部長は「教室にカメラを据え付ければ授業改善が楽になるんだが」と言っておられました。もちろん、教員の授業を査定するのが目的ではなく、各教員が優れた授業を参観することによって自分の授業を改善して欲しいという観点からです。

そのときは時間がなくて、講義記録システムを紹介することはできませんでしたが、教えて差し上げれば良かったと後で悔やんだものです。

情報科学部の特色の一つに講義記録システムがあり、情報科学部棟で行われた講義は原則として全て記録され、学内に公開していることは皆さんがご存じの通りです。

講義記録システムは、一つには学生の皆さんの復習の便宜を図って導入したのですが、教員が自分や同僚の講義を視聴することにより、他人の長所は取り入れ自分の短所は修正するためにも役立つことも狙いでした。[1] この狙いは部分的には実現されていました。自分の授業を反省するだけでなく、他の教員の授業を視聴して良い点を取り入れれば、上記の他大学の学部長の考えていることを既に実行していたわけです。

ところで、講義記録システムは「参観は実時間でなくて良い」という特徴があります。情報科学部の授業公開に対する考え方は、既に全講義を講義記録システムを通して公開しているのと同じであり、他教員は自分の好きな時間に好きな授業を参観することができるのだから、あらたまって公開授業を指定する必要はない、ということです。

2・4 平成 16 年度の取り組み

情報科学部でも、大学全体の FD 活動の一環として、組織的な教育改善を行うために情報科学部 FD 研修報告会を発足させました。

平成 16 年度の取り組みは、講義記録システムを利用した相互研鑽としました。具体的には、FD 研修報告会では講義記録システムの特徴を活用し、教員の授業経験を元に議論を行い相互に啓発を図るもので、月 1 回定期的に会合を開いています。

研修報告会では、各教員が他の教員に視聴して戴く授業をあらかじめ指定し、その視聴結果に基づいて議論を進めております。これは前節で述べたように、本学部では全講義を公開しているのと同じである、という特徴を生かしたものとと言えます。

3. FD 研修報告会の活動内容

情報科学部 FD 研修報告会は、平成 15 年度に設置され平成 16 年度も引き続いて実行されました。原則として毎月第 3 水曜日の午後で開催しました。開催日時と研修テーマを次に示します。

実際には、この活動は平成 15 年度から始まっていましたが、年度末に近かったこともあって平成 15 年度における活動について報告していませんでした。

本節では、平成 15 年度および平成 16 年度の開催を一括して報告します。

- (1) 第 1 回 平成 16 年 1 月 21 日 (水)
 - 講師 伊藤剛実習助手
 - テーマ：教育知識の共有化
 - 出席者 20 名
- (2) 第 2 回 平成 16 年 2 月 25 日 (水)
 - 講師 立川純実習助手
 - テーマ：HDL によるプログラミング演習における学習状況
 - 出席者 19 名
- (3) 第 3 回 平成 16 年 3 月 17 日 (水)
 - 講師 花野井歳弘助教授
 - 講師 澤田直助教授
 - テーマ：情報科学部におけるハードウェアシステム設計教育
 - 出席者 13 名
- (4) 第 4 回 平成 16 年 4 月 17 日 (水)
 - 講師 朝廣雄一助教授
 - 講師 安部恵介教授
 - テーマ：講義記録システムによる参観と討論
 - 出席者 19 名
- (5) 第 5 回 平成 16 年 5 月 19 日 (水)
 - 講師 有田五次郎教授
 - 講師 石田健一助教授
 - テーマ：講義記録システムによる参観と討論
 - 出席者 21 名
- (6) 第 6 回 平成 16 年 6 月 16 日 (水)
 - 講師 一ノ瀬裕教授
 - 講師 稲永健太郎講師
 - テーマ：講義記録システムによる参観と討論
 - 出席者 20 名
- (7) 第 7 回 平成 16 年 8 月 4 日 (水)
 - 講師 高橋浩文弁護士
 - テーマ：大学教育における教育活動と著作権
 - 出席者 24 名 (学部外 9 名、学内 15 名)
- (8) 第 8 回 平成 16 年 9 月 15 日 (水)
 - 講師 牛島和夫教授
 - 講師 合志和晃助教授
 - テーマ：講義記録システムによる参観と討論
 - 出席者 20 名
- (9) 第 9 回 平成 16 年 10 月 20 日 (水)
 - 講師 坂本直人教授
 - 講師 下川俊彦助教授
 - テーマ：講義記録システムによる参観と討論
 - 出席者 15 名

- (10) 第 10 回 平成 16 年 11 月 20 日 (水)
- 講師 成凱助教授
 - 講師 相利民助教授
 - テーマ：講義記録システムによる参観と討論
 - 出席者 16 名
- (11) 第 11 回 平成 17 年 1 月 26 日 (水)
- 講師 中野康明教授
 - 講師 仲隆助教授
 - テーマ：講義記録システムによる参観と討論
 - 出席者 18 名
- (12) 第 12 回 平成 17 年 2 月 23 日 (水)
- 講師 廣田教授
 - 講師 アブドゥハン助教授
 - テーマ：講義記録システムによる参観と討論
 - 講師 松本教授
 - テーマ：エルネット放送講座体験
 - 出席者 20 名
- (13) 第 13 回 平成 17 年 3 月 23 日 (水)
- 講師 宮崎明雄教授
 - 講師 米本聡助教授
 - テーマ：講義記録システムによる参観と討論
 - 出席者 20 名

4. 活動内容の評価

前節の説明から分かるように、情報科学部の全教員が各 1 回話題を提供し、多くの場合について、討論の材料として指定された各自の担当授業を全教員が参観しました。参観には講義記録システムを利用したため、自分の都合のよい時間に視聴することができ、講義記録システムの利点を再確認しました。

出席率も非常に高く、情報科学部教員 21 名に対してほとんどの回で 90% 近く、最悪でも 70% で教員の FD 活動が熱心かつ活発であることがわかります。

討議では授業の巧拙を論ずることはほとんどありませんでした。その理由は、各講師があらかじめ題材とした自分の講義を視聴し、長所・欠点を自己分析し改良手段を示していたからで、講義内容について討論する必要がなかったからと言えます。

授業を行う上での工夫については多くの討論がありました。例えば、一部の教員が開発した出欠を自動的に取るシステムなどは、情報科学部に限らず大学のどの授業でも原理的には使用可能なもので、効果が大きいものです。このシステムに関する論文を国際会議に投稿し採択が決定しています。[2]

ただ、情報科学部以外では設備の面で今すぐには導入できません。情報科学部の中でも、ある授業形態を前提としてシステムが作られているため、他の授業で使用するには多少の手直しも必要です。しかし、このような工夫を施すことにより、授業本来の目的以外の雑用を減ら

し、教員が授業に専念できるように努力しています。

5. 会議での議論と改善提案

議論の多くは、教育効果を改善するための本質的なものに関係し、予想以上の収穫が得られました。いろいろな提案がなされましたが、大学のカリキュラムを短期間で変えることはできませんから、改善は直ぐできることに限られます。長期的な改善については、関係部署と良く連絡して時期を逸せずに実現して行きたいと考えています。

議論された内容の一例を示してみましょう。

学生の理解度が大きく異なる点は多くの教員が指摘しています。その理由の一つは高校における学習履歴などによって学生の受講条件が異なることにあります。この問題に対処する一般的な方法の一つは到達度別クラス分けで、本学部でも、数学や英語では入学時にプレースメントテストを実施し、その結果によりクラス分けする方法を取っています。到達度別クラス分けは必然的に小人数教育となるため、教員数の確保が問題となります。

さらに、理系科目の多くは積み上げが必要であり、ある科目を十分に理解しないまま次に進んでも十分な学習は困難なことが多いのです。一方、大学のカリキュラムは同時進行を前提として組まれているため、個々の学生について見ると一箇所ですまらずいたため丸々一年遅れてしまうことがあります。しかし、到達度の低い学生に合わせたのでは多くの学生にとっては逆に不利になります。

このような現象に対して効果があると思われる提案もなされています。この提案を実現するためには、カリキュラムの改革と関係するため、実現時期をいつにするかが問題です。また、教員数が十分に確保できるかも問題です。

このような障害はあるものの、いろいろな提案を基盤にしてカリキュラム改善の討論を行い、FD の推進を図って行きたいと考えています。FD に限らず、改革と名の付くものはなんでも、不断の努力によって常に見直すことが必要です。

情報科学部では、平成 17 年度以降も FD のさらなる発展を目指しています。

◇ 参 考 文 献 ◇

- [1] 牛島和夫. ファカルティディベロプメント. 情報処理, 45(1), 84. (2004 年 1 月).
- [2] Kai Cheng, Limin Xiang, Toyohiko Hirota, Kazuo Ushijima. *A Web-based Classroom Environment for Enhanced Residential College Education*. The 4th International Conference on Web-based Learning (ICWL 2005), Hong Kong SAR, China. (2005).